

小中一貫教育校の仕組みに関する諸課題

◇小中一貫教育校として特徴的な仕組み

①通学区域の特例

小中一貫教育校の小学校の通学区域外居住者のうち、小中一貫教育校の中学校の通学区域内居住者については、希望により小中一貫教育校の小学校に入学できることとした。

②学校選択制度と小中一貫教育校

大泉桜学園においても、中学校選択制度を利用して大泉学園桜小学校から他の区立中学校を選択したり、通学区域外の小学校から大泉桜学園を選択して7年生から入学することができる。

③小中一貫教育校としての情報発信

大泉桜学園では、学校だよりやホームページによる情報発信は、すべて小中合同で一本化している。学校だよりを町会の回覧板で回覧したり、ホームページを頻繁に更新したりして、積極的な情報発信に努めている。

◆検証で確認された成果と課題

**1** 7年生から小中一貫教育校に入学してきた生徒も無理なく学校生活になじんでおり大きな支障はないと考えられるが、一方で不安に思う保護者も多い。保護者の不安を払しょくするよ  
うな情報発信を充実させる必要がある。

**2** 小中一貫教育校であっても7年生から他の中学校へ進学する選択肢があることはよい。  
☆7年進級時の選択肢がよいと思う割合 教員8割弱、保護者・学校関係者 約9割

**3** 学校だよりやホームページなどで積極的に情報発信が行われている。  
☆大泉桜学園は十分に情報発信していると答えた学校関係者 7割強

# 小中一貫教育校検証部会 検証のまとめ

平成25年9月に小中一貫教育校検証部会（部会長：上智大学教授 酒井 朗氏）を設置し、施設一体型小中一貫教育校大泉桜学園（平成23年4月開校）の成果と課題について検証を行った。

検証部会では、大泉桜学園児童生徒、保護者、教員、学校関係者に対するアンケートやヒアリングを実施し、「練馬区立小中一貫教育校設置に関する基本方針」（平成20年11月）に示されている「小中一貫教育校設置による期待される効果」に基づく5項目と、施設整備および小中一貫教育校の仕組みに関する項目をあわせて、7項目を柱とする検証を行い、平成27年10月に検証報告書をまとめ、練馬区小中一貫教育推進会議に報告した。



施設一体型小中一貫教育校 大泉桜学園（右は旧小学校校舎、左は旧中学校校舎）

検証項目 1

9年間を見通した教育課程による学習指導および生活指導の充実

◇小中一貫教育校としての特徴的な取組

①9年間の一貫した教育課程を編成

小中一貫教育校の教育目標として「桜学精神」を定め、すべての教科等で9年間一貫した教育課程を編成している。入学式・卒業式・運動会・音楽祭など主な学校行事は、小中合同で実施している。

②校務分掌組織を小中一体化

すべての校務分掌を小中一体化し、各教科の部会についても、小学校籍の教員と中学校籍の教員が共に教科部会を組織して、9年間を見通した視点から各教科等を研究している。

③4-3-2の区切りに応じた学校生活と教育活動

4年生はI期のリーダーとして委員会活動やたてわり活動で多くの役割を担っている。5・6年生が7～9年生と一緒に、部活動や児童生徒会で活動したり、I期（1～4年）・II期（5～7年）・III期（8・9年）に分かれた期別朝礼や5～7年生の飯ごう炊さんを実施したり、7年生を防災リーダーとして育成するなど、4-3-2の区切りに応じた教育活動を展開している。



◆検証で確認された成果

- 1 教員が日々の授業で9年間の系統性を意識するようになり、指導方法の工夫や改善が図られている。  
☆小中一貫教育校の経験が授業改善につながっていると答えた教員 約8割
- 2 小中学校教員が協力して、全教職員で全児童生徒を見守る体制ができている。  
☆学校が1～9年間を見通した指導と見守りに努めていると思う保護者 8割以上
- 3 4-3-2の区切りに応じて、子供たちが成長している。  
☆4年生で東校舎のリーダーとなった経験が役立っていると思う児童 約8割  
☆(教員ヒアリングより)7年生にはII期のリーダーとして、いろいろな分野で先頭に立たせて役割を与えた。期別朝礼、防災訓練など役割を与えれば成長する

検証項目 6

施設整備における効果と課題

◇小中一貫教育校としての特徴的な施設整備

①1つの職員室

小中一貫教育校の開校に向けて、西校舎にあった第2理科室および金工室を改修し、小中合同の職員室とした。

②4-3-2の区切りに応じた教室配置

東校舎（旧小学校舎）に1～4年生、西校舎（旧中学校舎）に5～9年生の普通教室を確保するため、西校舎にあった学習室、会議室、視聴覚室、生徒会室等を改修し、西校舎の普通教室を7教室増やした。

③異学年交流スペース

小中学校校庭の境界部分をメイン通路として舗装し、中央に新たに小中共通の校門を設置した。また、小中学生の共有スペースとしてランチルームを設置した。



◆検証で確認された成果と課題

- 1 職員室を1つにすることが小中一貫教育校の教育効果を向上させることにつながる。  
☆(教員ヒアリングより)職員室が同じなので意思疎通が進んでうまくいった。
- 2 1～4年生と5～9年生で校舎を分けたことは、子供たちの意識に大きな影響を与えている。  
☆(教員ヒアリングより)7年生は5・6年生がいることで先輩としての振る舞いがある。
- 3 小中学生の共有スペースとしてランチルームを設置したことで、交流給食などの異学年交流が進んだ。
- 4 体育施設や特別教室については、5・6年生が中学生と同じ施設を使用することは困難である。小中一貫教育校設置にあたって、体育施設や特別教室の小中共用を図る場合には、体格差や使用する教材・教具の違いについて十分に考慮する必要がある。

地域社会との連携による学校と地域社会の活性化

◇小中一貫教育校としての特徴的な取組

①PTA組織における小中連携

小・中学校のPTA組織を一体化し「桜連絡会」として設置した。小学部・中学部ごとの活動も残っているが、学校行事や各種委員会など多くの場面で小中一緒に活動している。

②地域との連携

開校に向けて、地域団体・地域住民を交えた小中一貫教育校推進委員会で検討を重ねた経緯もあり、地元町会や商店会などとの連携はかなり密である。隣接している特別支援学校とも定期的・継続的に交流活動を行っている。

③商店会・大学研究室との新たな共同活動

地元商店会、早稲田大学研究室と協力して、平成27年度からまちのコミュニティを活性化する取組を開始した。商店会のお祭りなどとの関わりをさらに深め、まちづくりの主役として活動していく予定である。

◆検証で確認された成果と課題

**1** 大泉桜学園ではPTAの小中連携の体制が構築されているが、さらなる交流・連携を望む保護者も多い。

☆小中の保護者同士の交流・連携が十分と答えた保護者 約3割

**2** 小中一貫教育校になったことで、地域に対する窓口が一本化され、地域にある3町会の連携も進んだ。

☆地域との関わりに積極的に参加している答えた児童生徒 8割以上

小学校から中学校への円滑な移行による安定した学校生活

◇小中一貫教育校としての特徴的な取組

①5・6年生は7～9年生と同じ校舎で生活

5・6年生は7～9年生と同じ校舎で50分授業を受け、標準服の着用が強く推奨されている。一方で、生活のきまりは1～4年生と共通のきまりを残し、保健室については、1～4年生の校舎の保健室も5～9年生の校舎の保健室もどちらも利用できることとするなど、接続期に配慮した対応を図っている。

②5・6年生で50分授業と一部教科担任制を実施

5・6年生は、学期ごとのまとめのテストを定期テストとして実施するほか、同一学年の学級担任が社会と理科の授業を交換するなどして一部教科担任制を取り入れている。

③全教員が児童生徒の状況を情報共有

大泉桜学園では、全教員に兼務発令が出され、1～9年生の児童生徒を見守る意識が浸透している。全教員がひとつの職員室で過ごし、毎朝の朝会で、児童生徒の状況や指導方針を情報共有している。

◆検証で確認された成果と課題

**1** 5・6年生が7～9年生と同じ校舎で生活することは、中1ギャップの解消につながるだけでなく、7～9年生の情操面にもよい影響がある。

☆(7～9年生と同じ)西校舎で学校生活を送ることはよいと思うと答えた5・6年生 約8割

**2** 5・6年生で一部教科担任制を導入することは、子供たちの成長に合っている。

☆一部教科担任制が子供たちの成長に合っていると答えた保護者・学校関係者 約9割

☆一部教科担任制が良い方法だと答えた児童 7割以上

**3** 5・6年生の50分授業については、保護者の多くは賛成だが、児童の意見は分かれる。

☆50分授業が子供たちの成長に合っていると答えた保護者・学校関係者 約7割

☆50分授業がちょうどよい長さだと答えた児童 5年生:約6割 6年生:約4割

**4** 大泉桜学園では、学年を問わず学校生活に対する満足度は非常に高い。

☆学校に楽しく通っていると答えた児童生徒 約9割

**幅広い異年齢集団による豊かな人間性・社会性の育成**

◇小中一貫教育校としての特徴的な取組

①小中合同の学校行事

入学式は1年生と7年生と一緒に、卒業式は6年生と9年生と一緒に実施しているほか、運動会・桜祭（音楽会）は、全校行事として1～9年合同で実施している。

②幅広い異学年交流活動

5～7年生による飯ごう炊さん、小学校低学年児童と中学生による交流給食など、さまざまな異学年交流活動を実施している。7年生を防災リーダーとした避難拠点訓練（5・6年生も参加）も実施している。

③5～9年生による部活動・児童生徒会活動

大泉桜学園では、すべての部活動で5年生からの入部を認めている。児童会と生徒会も合同とし、5～9年生と一緒に活動している。

◆検証で確認された成果と課題

**1** 1～9年生合同の学校行事は、下級生が上級生を目標にし、上級生は下級生の手本になろうと自己有用感を高めるなど、子供たちの成長にとってよい効果がある。

☆小中合同運動会で上級生を目標にした3～6年生 8割以上

☆小中合同運動会で下級生の手本になろうと意識した7～9年生 8割

☆小中合同行事が子供たちの成長にとってよいと答えた保護者・学校関係者 約8割

**2** 飯ごう炊さんや交流給食など幅広い異学年交流は、子供たちの人間性・社会性の育成につながる。

☆交流給食などが子供たちの人間性・社会性の育成につながると答えた保護者 約9割

**3** 部活動や児童生徒会活動に5・6年生が入ることで、活動が活発になってきた。

☆5・6年生が部活動に入ることで活発になったと答えた7～9年生 5割以上

**小中学校教員の相互協力による学力・体力の向上等の高い教育効果**

◇小中一貫教育校としての特徴的な取組

①桜ベーシックの研究

全教員が参加して、小中合同の教科部会を設け、学習のつまずきを検証し、基礎的な内容を指導するための系統的なカリキュラムづくりの研究に取り組んでいる。月に1～2回程度、小中合同で校内研究会を開いたり、研究授業を行ったりしている。

②特色ある教育活動

余剰時間を活用して、1年生から外国語活動を導入している。小中一貫教育校開校を機に整備された個別学習教室を活用し、算数数学・外国語などで少人数授業を展開したり、4年生以上で放課後学力補充教室を実施したりしている。

③体力づくりの取組

大泉桜学園では、5年生から部活動に参加することができ、運動部に参加する児童には日常的に運動する機会が提供されている。持久力を高めるために、なわとび集会やマラソン旬間の取組を行ったり、オリンピック教育推進校の指定を受けてコーディネーショントレーニングの講習会を開催するなど、子供たちの運動能力向上に取り組んでいる。

◆検証で確認された成果と課題

**1** 小学校籍・中学校籍が互いの授業を見合ったり合同で指導方法の研究を行うことで、授業改善につながっている。

☆(中学校教員ヒアリングより)算数から数学へ変わる時のフォローとして、7年生になったときに毎回繰り返して振り返りの問題や課題を出すことで定着するように工夫している。

**2** 学力調査の結果からは、基礎的な学力は、平均正答率と比べても十分についていると考えられる。ただし、活用力を問う問題ではやや課題がみられる。

**3** 東京都の体力等調査では、男女ともに東京都の平均を上回る種目が増えてきている。